



館長だより

山形県産業科学館

令和 7 年 1 0 月 1 日 (水)

発行 館長 加藤 智 一

ヨウシュヤマゴボウ

BOTANICA (<https://botanica-media.jp/1778>) より



本日も、晴天に恵まれて、通勤で通る道すがら、霞城公園にはたくさんの興味深い植物が私の目を楽しませてくれます。そんな中、今回ご紹介するのはヨウシュヤマゴボウという、ど派手で真赤なブドウのような実を付ける有毒植物の一種です。ヨウシュ

ヤマゴボウ科ヤマゴボウ属に属する多年草の草本で、別名アメリカヤマゴボウといい、日本全国で見ることが出来る帰化植物です。葉は、茎に対して互い違いにつく互生で、長楕円形の形をしています。葉の先はとがり、葉の長さが長いのも特徴で、10cm~25cmにもなり、長いものでは30cmにもなります。葉の表面裏面ともに毛は生えておらず、色は緑色をしています。葉の縁にはギザギザとした鋸歯もありません。秋になると紅葉するのも特徴です。茎は太く、紅色に染まり、長さは大きくなるものでは高さ1~2mにもなります。茎も葉と同じで毛はなく、茎の形は円柱形をしています。花期は6月~10月で、茎から総状に花序を出し、花をつけます。花は両性花で白色の花、もしくは淡い紅色の花を咲かせます。ヨウシュヤマゴボウの花には花弁がないのも特徴で、花弁のように見えるものは額です。額は5個あり、花の大きさは7mmほどでそこまで大きくはありません。果実は液果で、楕円形に似た形の果実を実らせませす。熟していない果実は緑色をしていますが、熟すと黒紫色になります。まるでブドウのような果実の形をしていて、実際にブドウと間違えられ食べてしまうことがあるそうです。果実の中には種子が10個は入っています。果柄は紅色に染まっており、果実が落ちたあとも残っているのが特徴です。また、果実をつぶすと紅紫色の汁が出てきますが、この汁はインクとして使われていたこともあるのだそうで、服につくと洗っても落ちません。そこで、草木染めの染料と

して利用されることもあります。

しかし、この植物最大の特徴は、毒性でしょう。全体に毒性がありますが、根が一番毒性が強く、葉にも毒性があります。果実の中に入っている種子も強い毒性を持っています。もし間違えて食べてしまうと、腹痛・嘔吐・下痢を起こします。食べた量が多いとけいれんや意識障害、呼吸障害、心臓麻痺を起こすこともあり、最悪の場合はそのまま死亡してしまいます。根については、皮膚に触れただけで強い刺激を受けることがあるので、絶対に素手では触らないようにしましょう。ところがこの果実、鳥類はよく食べているのです。なぜ？実は果実には毒性はほとんどなく、果実の中に入っている種子に強い毒性があるのです。ですので、種子を砕いたりしなければ、鳥類は問題なく食べることができるというわけですね。

ヨウシュヤマゴボウは漢字で書くと「洋種山牛蒡」です。なぜこのような名前がつけられたのでしょうか。ヨウシュヤマゴボウの名前の由来は案外そのまま、根がゴボウに似ていることからヤマゴボウと呼ばれました。さらに原産地が日本ではなく西洋であることから、西洋が洋種に変換され「西洋から来た山牛蒡」で「洋種山牛蒡」と名付けられたようです。また、別名で「アメリカヤマゴボウ」と呼ばれることがあります。この由来も原産地が北アメリカということに由来しています。花言葉は、「元気」「野生」となっていますが、一説には、野生で元気に増えていくのが由来だそうです。また、その他の花言葉では「内縁の妻」という花言葉もあるそうです。毒性の強い植物だけに、意味深な理由を感じるのには私だけでしょいか。

※毒性成分 フィトラッカトキシン：フィトラッカゲニンをアグリコンとする数種の配糖体（サポニン）の混合物。主成分はフィトラッカサポニン E。有毒成分は煮沸により分解されます。

